

第 41 回緩和ケアチーム抄読会

平成 22 年 2 月 5 日

担当 吉川 ひろか

“The existential impact of starting corticosteroid treatment as symptom control in advanced metastatic cancer”

進行転移癌における症状コントロールとしてのコルチコステロイド治療開始の実存する衝撃

S Lundstrom, et. al, Palliative Medicine 2009;23:165-170

背景：進行癌患者において、コルチコステロイドは多くの症状緩和目的で使用される。

例えば、食欲増進・嘔気軽減・気力体力の改善などが見込まれる。

これまでの研究では、個人を対象にした、ステロイドの実存する影響を調査した研究はないことから、今回の研究が行われた。

症状緩和治療において何を成し遂げればよいのかということは、緩和ケアにおいて見逃され、深い意味での症状緩和の研究は少ない。

患者にニーズを考える際、現実にある影響を見ることが患者を全人的にとらえることとつながるとされてきた。

目的：転移進行がんに対する、症状緩和目的で使用したコルチコステロイド開始後の深い意義と関連性を調査する。

対象：2005 年秋から登録されているスウェーデンの都会にある 38 床の緩和ケア病棟と在宅ケア患者 28 名患者

本施設の 90%の患者ががんを告知され、2005 年の平均生存期間は 14 日

その内 10 名が本研究の対象となった。

10 名の内訳⇒女 6 名・男 4 名 (Table 1)

消化器・婦人科がんが多く、平均年齢 74 歳(49 歳から 88 歳)

原因疾患・試行/予定治療・平均生存期間(24 日)・教育レベルも多彩であった。

方法：ステロイド投与の決定は調査に関係のない医師によって決定された。

ステロイドはベタメタゾン 4mg が経口 1 日 1 回投与された。

その後医師から患者に、研究者が行く許可を得た。

Appendix A という多職種で構成された緩和チームで議論されたインタビューガイドを作成した。

患者へのインタビューはステロイド投与前日と投与後 1 週目の 2 回試行された。

対象患者のうち 1 名が治療開始後 1 週目で死亡したため、19 のインタビューが行わ

れた。インタビューは一回 10～40 分、テープレコーダーに記録し、言葉通りに転写された。SpO2 のデータも参考値として検討された。

調査内容は、manifest(記述的な)焦点・latent(解釈の)焦点の両方を使用し、質的な分析を行った。

- 分析法 1)主な印象を得て、研究に適切なテーマを認識するため何度も資料を吟味する。
2)インタビューは注意深く再読され、仮の分類に入れられた。
3)仮の分類に入れる同意と主な構成要素を見つけるために全ての著者が参加した。

結果：

*Manifest focus (Table 2)

1)基礎にある症状 (ステロイド投与前)

疼痛・悪心・疲労感・全般的な治療・食欲低下・体重減少・力(体力・精神力)の低下
患者は体力低下・虚弱・圧倒的な倦怠感によるひどい疲労感を経験していた。

患者 no.7 初回インタビュー

“完全に力がなかった。いつも寝ているか、休むか、目を閉じているしかなかった。”

2)治療への期待

ステロイドの副作用として、発汗や打撲傷?があるが、患者達はステロイド治療が可能とするポジティブな効果による影響力を信じていると表現した。

個人的な願いや期待は、食欲増進や身体的能力がよりよくなることに焦点が当てられた。期待に応じることは、患者が失った日常活動を取り戻すことを助けることにつながる。

患者 no.10 初回インタビュー

“気分がよくなることを期待します。ベッドから出るとき、落ちるという覚悟なしには動けなかったんです。”

3)治療効果

—全身への効果

患者は食欲低下や悪心等の身体症状の改善を認めた。

はっきりとした効果はステロイド投与後 1～3 日で現れた。

3名の患者が体力・気力ともに改善し、一方2名の患者は気力の改善を経験した。

患者 no.2 2回目のインタビュー

“筋力はもちろんないけど、身体の違う力なんだ。そんなによくはないけれど、とまることなく歩けました。”

半数の患者が、嘔声・紅潮・口渇の副作用を認めた。霞目のでた患者もみられた。

—(機能の)正常化

患者達は、体力的に活動的になり、日常の活動に参加することができるようになった。
他人との関わりを必要とするようになった。
その人らしさを取り戻したことが訪問者により報告された。

*Latent (潜在的な) focus

存在の意味(関連)

初回のインタビューにおいて、病気の存在・症状の進行・自主性の喪失は、脅威や差し迫る死へと関連づけられた。

2名の患者は、腫瘍医は化学治療の開始に耐える力はないと懸念する中、緩和的化学治療を検討していた。化学治療は命綱を意味しており、それをできないことは生きること
にたいする脅威であり、死への恐れを助長することを意味した。

進行する体重減少は心配や脅威を強固にする。身体的能力の低下もまた、自主性の低下
や死の象徴と気づく。

患者 no.10 初回インタビュー

“そうすべてがのろわれたように早く進んでいくことを悩んでいます。私はもう力がなくて。私の腕を見て、全部どこかに行ってしまった。1ヶ月で10kgも減ってしまいました。”

ステロイドのよい効果を経験した患者達は、健康を意味する健全な生活への思いを表現した。力と身体的能力とともに、症状の軽減が見られた患者は、患者に自主性を取り戻させた。

患者 no.8 2回目のインタビュー

“機敏になりました。座ったり食事をしに、ダイニングルームまで行って、少しだけ笑うこともできる。前は、歩いてダイニングルームまで行けなかったし、ふらふらしてた。今は、力が出てきた気がするし、いい感じだよ。”

身体症状の悪化に対するステロイドの急激な効果は、患者の死への脅威を減らし、希望を取り戻し、生きることへつなげることができる。

たった1つの身体症状の改善でも、ポジティブな変化は患者個人に希望をもたらした。初期の劇的な効果は、魔法のように思われた。

2名の患者には明らかな効果は見られなかったが、それにより失望したり希望を失うことはなかった。

結語: ステロイドは様々な症状をコントロールするばかりではなく、身体症状緩和により、自主性の強化と希望を育てることができる。

よい症状コントロールは、その効果のみならず、深いレベルでの希望を患者にもた
らす。日常で気づくことは少ないが、症状の改善は患者の存在意義への変化へとも
つながっていくものと考えられる。今後更なるステロイド治療の検討が必要である。

コメント：ステロイドは緩和ケアにおいて、効果ある薬剤であるが、ステロイドを使用し
た際の、患者の実感やよい治療効果によるスピリチュアルの要素まで、考察してい
る点がこの論文の新しい視点であり、今回取り上げた。

ステロイドは副作用で不眠の原因となったり、精神的な影響もあるが、
体調の改善がもたらす患者へのQOLの向上への影響力も加味して使用していきたい。